

あとがきに代えて

## ルネ・ロランの写真

「アンドレ・ブルトンと瀧口修造」を追って

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今年で第13回目を迎える。「アンドレ・ブルトンと瀧口修造」がこのたびのテーマである。

展覧会の展示作品は次のとおりである。

- 1) アンドレ・ブルトン：“切り裂きジャック”(1942年) コラージュ、ミクストメディア
- 2) ジョセフ・コーネル：“アンドレ・ブルトン”(ca.1960年) コラージュ(マン・レイによるブルトンの肖像)、水彩
- 3) マン・レイ：写真(アンドレ・ブルトンの肖像を中心に) 15点
- 4) ルネ・ロラン：写真(1958年10月9日、ブルトン邸におけるアンドレ・ブルトン、瀧口修造、東野芳明およびブルトン邸の室内) 22点
- 5) アンドレ・ブルトンの主要著書およびブルトンの序文、テキスト入りの画集、カタログ等29冊
- 6) 瀧口修造：アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳“超現実主義と絵画”(現代の芸術と批評双書No.17)厚生閣書店刊(1930年)および同訳書の改訳原稿(1970年頃)
- 7) その他関係資料  
トワイヤン：“ブルトンの肖像”(1952年) エッチング  
アンドレ・ブルトン：自筆書簡(1920年)  
ジゼル・フロイト：“ブルトンの肖像”(ca.1960年) 写真ほか

以上であるが、その詳細についてはカタログおよび出品リストをご参照いただきたい。

展覧会カタログのテキストについてであるが、まず瀧口修造のブルトン関係のエッセーのうちその追悼の一文を再録した。ついで巖谷國土さんにご寄稿いただいた論稿を軸に、若い研究家4氏にご寄稿いただいた。これらを列記すると次のとおりである。瀧口修造：追悼—アンドレ・ブルトンの窓 1966年(初出：みづゑ 1966年12月号 美術出版社刊；コレクション瀧口修造 第9巻 1992年 みすず書房刊収録)

巖谷國士：瀧口修造とアンドレ・ブルトン

星埜守之：シュルレアリスムと絵画と瀧口修造と

恩蔵 昇：瀧口修造の書齋

土淵信彦：『希望のはじまり』について

鈴木雅雄：アンドレ・ブルトン関連著書概略的説明

なお、私は「太陽」1993年4月号、特集「瀧口修造のマイクロコスモス」(平凡社刊)に、“ブルトンとの出会い”と題し、この展覧会の予告編めいた小文を寄稿したのを付け加えておきたい。

その小文のなかでも触れたが、なぜ、ブルトンを採り上げるのか、という理由である。それは言うまでもなく、シュルレアリストである瀧口修造にとって、アンドレ・ブルトンはまさしくアルファーにしてオメガーと言うべき存在であるからである。何故ならブルトンは瀧口修造の生を変え、その生の方向と生涯を決定づけた人物であるからだ。つまり、ブルトンはオマー・ジュ・瀧口修造展の原点なのだ。

ところが、ブルトンの造型作品の点数は極めて少ない。ブルトンが思想家であることからすれば当然のことである。幸いにも、ニューヨークのティモシー・バウムさんの尽力により、1点入手できたのは望外の幸せというほかないのである。しかし、ブルトン1点では展覧会にならない。

そこで、ヴィジュアルな作品をみせる画廊の立場から、ジョセフ・コーネル、マン・レイ、ルネ・ロラン、トワイヤン等のブルトンに関連する諸作品を収集し展示することとした。と同時にブルトンの主要著書のほか、特にブルトンの序文、テキストが含まれている画集、カタログに力点を置いた。すなわち、マックス・エルンスト(リトグラフ入り)、イヴ・タンギー(デザイン：マルセル・デュシャン)、クルト・セリグマン(リトグラフ入り)、ダリ(エッチング入り)、トワイヤン(リトグラフ入り)、マッタ(リトグラフ入り)、アンドレ・マッソン、マン・レイ、パブロ・ピカソ等で当然のことながら殆んどシュルレアリスムの画家である。

さて、ルネ・ロランの写真について、その入手経緯の概略を申し述べたい。

昨年6月、「ブルトンと瀧口修造」というテーマを考えた時、まず私の脳裡に浮んだのは、はるかな昔、「みづゑ」でみたお二人の写真であった。瀧口先生が椅子に座って画集らしきものを眺めておられるそばに、ブルトンが立って、何か話しかけている様子を撮った写真である。あれはいい写真だ。今回の展覧会にドン・ピシャリの写真である。何とかあの写真が手に入らないものか？

では、どうするか？ まず、あの写真が載っている「みづゑ」をさがすことだ。何時頃の「みづゑ」か？ そのためには瀧口先生のブルトン訪問の時期を知らねばならない。早速、瀧口修造自筆年譜をひもといた。1958年の頃には次のように記されている。

「……十月パリで、アンドレ・ブルトンを訪ねることができたのは生涯の収穫であった。……」

11月以降の「みづゑ」をさがせばよい。書架に登り、その年代あたりの「みづゑ」を引っぱり出し、ひっくり返した。あった！ 1959年3月号に載っていた。瀧口先生は「アンドレ・ブルトンの書齋」と題しエッセーを書いておられる。そして、その文中に8点写真が載っている。その最初の頁に、この写真がある。そこには、Photo René Rolandと記されている。

ルネ・ロラン。このフランス人とおぼしきカメラマンはいかなる人物であるか？ いずれにせよ複製してこの写真をカタログに使用するとすると撮影者のルネ・ロラン氏と美術出版社の了承が必要だ。

もう一步踏み込んで、この写真のフィルムが手に入らないものか？ ルネ・ロラン氏と連絡がとれないものか？

そこで、ムッシュウ・ルネ・ロランの追跡が始まった。まず、美術出版社にきいたが、昔のことで分からない、その当時の編集者は知っていると思う、との返答であった。そこで旧知の福住治夫さんにきいたのである。そこで意外なことが分かった。ルネ・ロラン氏は国籍はフランス人だが、母上が日本人で、日本語も堪能である。戦後、パリ・東京を往復し、「座右宝」(美術書出版の会社)の美術作品の写真のしごとをしていた。草月が氏の消息を知っていると思

う。と話して下さった。

そこで私はハタと思い当たるところがあった。私はルネ・ロランさんに会っているのだ。恐らくは昭和48年乃至49年(1973~74)頃、私が南画廊に勤めて間もない頃であるが志水楠男さんの紹介で会ったカメラマンが、このルネ・ロランさんだ。背が比較的高く、茶色の皮製のバックを肩から掛けておられたのを何故か憶えている。これは面白いことになってきた。うまくすると連絡がとれるかもしれない。

私は早速、草月出版の立川正憲さんに電話をし、ルネ・ロランさんの消息をきいたのである。数日後、立川さんからパリの住所がファックスで送られてきた。

私はルネ・ロランさんに手紙を書いた。来年の7月、オマージュ瀧口修造展はアンドレ・ブルトンと瀧口修造がテーマである。あなたの「みづゑ」の写真はこのテーマに欠かせない写真である。ぜひともこの作品を使用させてほしい。もしもフィルムがあるのなら、ぜひとも使用させていただきたいと、別便で当画廊の主要カタログを送り、返事を待った。昨年7月のことである。

ところが、10月になっても返事がない。しかし宛先不明で郵便物が戻ってこないのも妙である。どういことであろうか？ 分らん、しかし、まずこれは駄目であろう。私は半分あきらめていた。

10月下旬から11月初旬にかけて、私は商用で、ミラノ、ベルリン、パリに出掛けることになった。折角のチャンスであるから、パリで、ルネ・ロランさんの消息を確かめよう、と思った。再び立川さんに連絡し、パリでルネ・ロランさんの消息を知る人物をご存知であれば教えてほしいとお願いした。するとしばらくして立川さんはパリのカメラマン熊勢川紀氏にきいてみたら、と氏の電話番号を教えて下さった。その番号をノートに記入し、私は娘の真知とともに東京を発った。

パリではブルトン関係の著書、画集、カタログを手に入れるのがひとつの大きな目的であった。巖谷國士さんに紹介していただいたブルトンの研究

家でパリ大学に留学中の鈴木雅雄さんに、予めシュルレアリスム関係に強い本屋を4軒ばかり教えていただき、3人で効率よく歩き廻った。その時の成果が、今回展示のブルトン関係の著書、画集、カタログである。

さて、もうひとつの大きな目的はルネ・ロランさんである。果して会えるのか？ まず熊勢川さんに電話をすると、ルネ・ロランさんはパリに居ない、すでに田舎に引越したという。その電話番号をきき、ルネ・ロランさんに電話をかけたのである。かくしてやっとルネ・ロランさんを掴えたのは、昨年11月7日のことであった。

ルネ・ロランさんの話では、ただいま母上とともに、パリから列車で1時間半、さらにその駅から50Km離れた小さな村に住んでいる、という。私の送った手紙、カタログ等は受けとったが、当方の事情でその返事もせずに申訳なかったと謝られたのである。私はあなたに南画廊で会った記憶がある、と話すと、記憶はあるがあなたの顔は憶えていないと言われる。それはそうであろう。もう20年前のことである。

問題のブルトン邸での写真のフィルムはお借りできますか、ときくと、あのフィルムは日本に置いてきたような気がする、或いは東野芳明さんに渡したような気もするが、はっきりしない。ともかく引越したばかりで荷物の整理もしていないので、念のため改めて調べたうえでご返事しましょう。とのことであった。とりあえずは「みづゑ」の写真を複写して使うほかないでしょう、という話であった。3~40分、電話で話したが、福島秀子展の話をする、大変なつかしそうであった。

この電話の話で、まずフィルムの入手はむづかしそうだという感触であった。何しろ35年前のことである。フィルムが出てくることの方が不思議だ。「みづゑ」の複写しかあるまい。と私は覚悟したものである。ルネ・ロランさんと直接話が出来ただけでもよいとせねばなるまい、私はそう思った。直接お会いしたかったが、当方に時間的な余裕がなく、断念せざるを得なかった。

年が明けて今年の1月4日、私は画廊に行き年末年始の大量の郵便物に目を通した。そこで一通の大きな黄色い封筒が目にとまった。送り主はルネ・ロランとある。急いで封を切ると、二束のフィルムが入っている。フィルムをすかしてみると、何と問題のブルトン邸のブルトン、瀧口の写真ではないか！私は息をのんだ。フィルムが出てきた！見つかった！

この大封筒のなかにはフィルムのほかに、私あての手紙と福島秀子さんあての封書が同封されていた。ルネ・ロランさんの手紙は、カナ文字と漢字の手紙であった。ひらがなではなかった。何か遠い時間のかなたから送られてきた不思議な暗号のように私には思われた。

12月26日付の私あての手紙はこまかい字でビッシリ2枚書かれていた。アンドレ・ブルトンを瀧口先生と東野芳明さんとで訪れたのは、その頃の予定表のノートが出て来て1958年10月9日であることが分かった。それをたよりに資料を整理していると同封の2本分のフィルムが見つかった、と記されている。さすがプロのカメラマンである。整理がいい。

また、勅使河原蒼風、堂本尚郎、今井俊満、福島秀子、タピエ、マチュー、サム・フランシス、海藤日出男、志水楠男等、その当時ルネ・ロランさんと交友のあった人々の名前が若干のエピソードを交え記されていた。はるかな青春時代をなつかしむ心情が自然と沁み出ている手紙である。このカナ文字はルネ・ロランさんの歴史を示すにふさわしいシンボルのように思われた。

後日、ルネ・ロランさんと親しい堂本尚郎夫妻から、ルネ・ロランさんの話をきき、堂本さんより2つ年下(つまり今年63歳)であること、またルネ・ロランさんのお祖母さんも日本人であることを知った。

早速、フィルムを調べてみると、35mm2本分で、56コマあった、カメラマンの服部冬樹さんと相談し、検討の末、22点を選び引き伸ばすこととした。このルネ・ロランの写真は、東西の偉大なシュルレアリスト、アンドレ・ブルトンと瀧口修造の歴史的な出会いという意味でも、また1958年のブルトンの肖像とブ

ルトン邸の空間の再現という意味でも、美術史上、貴重なドキュメント写真というべきである。時にブルトン62歳、瀧口修造55歳、東野芳明28歳であった。今を去る35年前の現実である。

これらの写真に一貫して流れている空気は一種の快ろよい緊張感である。ブルトンはいつもむづかしい顔か、とりすました顔が多いが、このなかには笑っている顔がある。これには思わず、私もほほえんだ。ブルトンと握手している瀧口先生は目をつむっておられる。思うに感慨のあまり、思わず、じいっと目を閉じられたのであろう。それに若い東野さんの何というういういしさ！

マン・レイの戦前のブルトンの写真17枚に対するルネ・ロランの戦後のブルトンと瀧口修造の写真22枚。それらを対比するかたちで、会場に展示する情景を私は想像した。これで今回のオマージュ瀧口修造展は「アンドレ・ブルトンと瀧口修造」のテーマにふさわしいものとなった、とひとりごちたものである。

かくしてムッシュウ・ルネ・ロラン追跡の旅は終わった。35年間のねむりから蘇ったフィルム、そこから生まれた写真を手にとり、眺めながら、私はこれは奇蹟だな、とつぶやく。これら写真のもつ35年前の現実、みる人それぞれにそれぞれの想いをめぐらせるであろう。それだけの強いリアリティと魅力をこの写真もっているのだ。

最後にこの展覧会のためにご協力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。なかんづく、この展覧会の企画、カタログの作成に終始ご協力いただいた巖谷國土さん、シュルレアリスムの熱烈なる研究者にしてわが友ティモシイ・バウム (Timothy Baum) さん、上記のフランソワ・ルネ・ロランさん、そして瀧口綾子夫人に深甚なる謝意を表すものである。ありがとうございました。

1993年6月5日

佐谷画廊  
佐谷和彦